

## 保育のヒント～「科学する心」を育てる～

### 表現を楽しむ／認定こども園 若草幼稚園

興味をもって毎日のように観察したり、発見や驚きなどで心が大きく動いたりしている子どもたちが、気付いたことや思いを言葉にしている姿はありますか？

この事例の子どもたちは、園庭や園に近く自然豊かな里山“すすくの森”で虫と出会い、興味を深めています。そして、製作遊びを楽しむ様々な素材のある環境や、子どもの実態を捉えて寄り添う保育者の関わりにより、豊かな表現を楽しむ遊びを展開しています。3歳児らしい表現で遊びを楽しむ6月と9月の姿をご紹介します。



### カブトムシ／3歳児

#### 6月の姿：虫作り

##### ● 事例1：カブトムシ 作ろう（6月中旬）

毎日登園してくると、製作コーナーで物作りをするSちゃんは、自分の気に入ったものを箱に貼り合わせ、イメージした物を作ろうとする姿があった。また、園での体験の他にも、「Sちゃんが虫が好きになれるように」と考えた保護者が、近くの公園と一緒に虫取りにいくなどの働きかけがあった。そのため、Sちゃんは入園当初は虫が苦手だったが、ダンゴムシを見付けたり小さな虫などには触ったりするようになっていた。また、幼稚園の自分のマークが「カブトムシ」だったこともあり、カブトムシやクワガタが好きになった。図鑑で調べるのもカブトムシで、毎日のようにそのページを開いては眺めていた。

いつものように登園し、荷物を片付けて製作をするSちゃん。選んだ物は、空き箱、広告紙を巻いて作った棒である。棒を何本か取ると、箱に、真剣にテープで貼り合わせ始めた。しばらくして、保育者にできたものを見せに来た。納得のいくものができたようで、「カブトムシ！」と言い、Sちゃんはニコニコしていた。作ったものは、角が1本で、足がしっかり6本あるカブトムシであった。保育者はわざと、「何で足6本が？」と聞くと、「だって図鑑に書いちゃったもん」と図鑑を見せに来た。

その後も登園するとカブトムシを作ることが楽しみになったSちゃんは、2週間もの間、ずっと作り続けていた。



##### ● 事例2：子どもの様子から、保育者の考えた虫作り

その後、クラスでカブトムシ作りが広まった。Sちゃんの作品を見て「どうやって作るが？」と興味をもった子どもたちが、作り始めた。その様子を見て保育者は、他にも作れるものはないか考えた。そこで、5月からクラスで飼っているカタツムリなら、子どもたちが親しみをもって作れるのではないかと考え、空き箱などの素材の中から材料を選んだ。選んだのは、チーズの箱、ラップの箱、広告の棒2本である。保育者が作っていると、子どもたちも作りたいと近寄ってきて、一緒に作るようになった。製作が苦手だったTちゃんも保育者に「作りたい」と話しかけてきたので、一緒に作った。他にも、カプセルトイのフタに、丸く切った色画用紙を貼り、触覚をつけて、テントウムシを作った。また、皆に見てもらえる様に、保育者が、作った虫を展示するスペースを作った。見る環境が出来たことによって、子どもたちは友達の作ったものに興味をもち、作ることに興味を示すようになった。

## ● 考察

Sちゃんに興味をもった虫を作ることが多く、その中で、最近図鑑で親しみをもった「カブトムシ」を作ろうと考えた。日頃から自分で空き箱などの素材を選んだり、「こんなの作りたい」と保育者に言ってきたりするSちゃんらしい工夫したカブトムシができた。

その後、Sちゃんが作った虫に興味をもった子どもたちの様子を捉えた保育者は、作品をヒントに、空き箱などの素材を使って他の虫を作れるような環境の工夫をした。そして、保育者が子どもたちが親しみをもっているカタツムリを作ることが、大きなポイントであったと思う。また、他の子どもたちが見られるように展示スペースを作ったことで、他の子どもたちにも虫作りへの興味をもたせるきっかけをつくることができた。

## ✿ 9月の姿：虫ごっこ

9月になり、クラスのほぼ全員が、虫を捕まえることが楽しくなり、園庭や“すくすくの森”で虫を追いかける姿が多くなった。また、春生まれたバッタたちが大きくなり、子どもたちが草むらを進むだけでたくさんの虫が飛び交う。子どもたちは以前、目の前の地面しか見ていなかったが、少しずつ飛び交う虫の動きを考えて、虫の飛び方に視線をおくようになってきた。虫の動きを見ながら、手で「カマキリの手ってこうやろ？」とカマキリのマネをする姿も出てきた。観察の目も視点が変わってきた。

### ● 事例3：虫ごっこ（9月）

夏休みが明け、久しぶりに“すくすくの森”へ出かけた子どもたちは、朝から「俺バッタ探す！」と虫を探す気満々である。着いたと同時に、森の緑を全身で感じ、季節の変化と共に風景も変わっていることに気付いた子どもたちは、わくわくしている様子であった。

虫が居そうな場所ということで、ススキや草の生い茂った草むらに向かった。早速「あっバッタ！」と追いかける子どもたち。「先生捕まえたー」「こっちに大きなバッタおる」と、子どもたちと一緒に虫を捕まえる保育者を、あちこちから呼ぶ声が聞こえた。

しばらくすると、「先生！これ頭に付けて！」という声が聞こえた。見ると、Tちゃんが手に草を2本持っていた。「何するの？」と保育者が聞くと、「あのね、あのね、カタツムリになるが」と言ってニコニコしていた。触覚に見えるように、保育者から頭に草をつけてもらい、草むらを歩くTちゃん。他の保育者に「Tちゃん、いいね。バッタ？」と聞かれると「違うき！カタツムリやきー！」と言って「でんでんむーし、むーし…♪」と歌いながら、楽しそうにまた歩いていた。



### ● 事例4：「これカブトムシや！」

Tちゃんがカタツムリになったこと（事例3）をきっかけに、園庭や“すくすくの森”で子どもたちが虫になって、友達とやりとりすることを楽しむようになった。自分で見付けた草を頭に付けることが、何よりも嬉しかったようである。

“すくすくの森”に行くと、虫を探るか、虫になるために草や枝を探すことが子どもたちの遊びの中で一番多かった。みんな下を向いて、探し物をしているようで、すっかり夢中になっていた。保育者も以前は、カラー帽子にマスキングテープで草や枝を貼り付けていたが、すぐ取れてしまうことがあった。そこで、頭にすぐに付けられるように、画用紙でベルトを作っておき、子どもたちが付けたい時に取り出すようにした。子どもたちには事前に、保育者が持っていることを伝えていたので、虫になれそうな草を見付けると、「先生！あれちょうだい！」と早速言いに来ていた。

皆が、チョウチョ、カタツムリ、バッタ、コオロギになって遊んでいると、枝を持ってきて「先生、これカブトムシのつものや！」とYの字のように分かれた枝を持ってきたSちゃん。すると、他の子どもたちもYの字の枝を必死に探し、カブトムシがどんどん増えていった。



## ● その後の姿

---

なりきる姿にも変化が見られ、チョウチョになってままごとをしたり、役に分かれてごっこ遊びをしたりする姿が増えた。また、動きはチョウチョの羽の動きをするなど、子どもたちなりに、イメージをもって虫ごっこを楽しんでいる。

## ● 考察

---

それぞれが好きな草を見付け、その中でもこだわって探す子ども、友達と同じものを探す子どもなど個性の出るものとなった。また、カタツムリ同様、図鑑でよくカブトムシも観察していたことで、角の形に似ていた枝と重ねていることから、観察する力が6月頃に比べてより培われているように感じた。草や枝を見立てて、虫になりきることを楽しんだり、虫になってごっこ遊びを楽しんだりすることが、新しく子どもたちの遊びの中に加わった。何気ない子どもの気付きが、保育者の受け止め一つで、他の子どもにも伝わり、その子どもが模倣することでまた広がっていく。子どもの“楽しいと感じたもの”に反応する姿が、見られたように感じた。

無断転載を禁ず。引用する場合は右記を必ず明記願います。「(C)公益財団法人 ソニー教育財団 ソニー幼児教育支援プログラム  
幼児教育保育実践サイト <http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>」